九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

社会理論と「偶然」に関するシステム論的考察 : マルクスの諸論を出発点として

藤嶋, 康隆
九州大学大学院人間環境学府博士後期課程

https://doi.org/10.15017/8040

出版情報：人間科学共生社会学. 5, pp.103-124, 2006-02-10. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

社会理論と「偶然」に関するシステム論的考察

― マルクスの諸論を出発点として ―

藤　嶋　康　隆

要　　旨

本稿の目的は優越要因説を擁護することである。優越要因説はマルクス主義社会理論の代名詞と呼ばれるほどマルクスの諸理論と結びつけられて考えられることが多い。マルクスの諸理論は現在あまり着目されないが、筆者は特にマルクス流の経済を基盤とした優越要因説はあらためて再考されるべきであると考えている。議論をすっきりさせるためにドゥルーズの議論に示唆を得て、微分法や導関数という数学的方法によってマルクスの諸理論とパーソンズ的なシステム論を対比させた。次に「偶然」をめぐるラカンとデリダの議論を検討し、人間には偶然を必然にかえるメカニズムが存在する点でラカンを擁護する一方、「偶然」を「偶然」のまま扱うデリダの議論をルーマンのシステム論と親和的なもとでると解釈した。しかし賃労働によって得た貨幣によって成り立つ資本制経済のもとでは意識システムの行う観察は経済システムの行う観察と重なる場合が多く、結果的に社会を経済システムから観察するというマルクス流の優越要因説が人間の意識にとって支配的であり、避けられないということを論じた。

キーワード：優越要因説、システム論、微分法

1　本論の目的

本稿の目的は経済を基盤とする優越要因説（dominant factor theory 以下 DFT と略）の擁護[1)]である。DFT はそれがマルクス主義の代名詞として用いられるように現在ではあまり支持されていない。しかし、実は DFT 特にマルクス主義的な DFT は意識されることなくあらゆる場面で用いられている。

例えば山田昌弘の『希望格差社会』(2004) を参照してみよう。山田は現在の社会の負の側面を1998年にその原因を見出している。1998年は実質 GDP が初めてマイナス成長になった年であり、この不景気がリストラと呼ばれる雇用調整を導く結果となった。長引く不況は企業に産業構造の変化（正規雇用の削減、派遣社員の増加）をもたらした。こうした現状を受け、こ

の年以降自殺者は3万人台で下げ止まりし、一年後の1999年にフリーターが急激に増加した(1998年に採用されなかった学生のフリーター化が原因)。官庁統計を利用した山田のこうした議論は大変大きな反響を生んだ。しかし、山田のこの説明はGDPという経済現象から雇用関係（生産関係）の変化を説明する典型的DFTで、実はマルクス主義的な社会変動論以外の何ものでもない。しかし、山田の議論がマルクス主義的であると批判する人は誰もいないであろうし、誰も自覚していない。つまり、私たちはあらゆる場面で経済現象を基盤に社会現象を説明しているのであるが、一定の物質的豊かさを実現した先進諸国では経済問題がいかに重要な問題であるのか自覚しにくい環境にある。しかし、経済を過小評価するような社会の雰囲気は先進国でしか通用しない。

2001年以降世界ではテロが多発するようになった。こうした状況を文化の共訳不可能性という考え方から理解するのが主流になっているように見える。世界の動揺を「文明の衝突」という文化本質主義の観点から理解してはならない（Crépon2002=2004)。「歴史の終わり」というリベラルな政治的宣伝の方がまだ穏健である。なぜなら、文化が本質的に対立するものであると考えると、世界からは永久に紛争が絶えないことになるからだ。パリの暴動はフランスの移民同化政策にあるといわれるが、移民の失業率はフランスの平均失業率の2倍から3倍だということを忘れてはならない。テロとの戦争を文化対立の問題へと還元するのではなく、その背景に横たわる貧困問題から理解しよう。

イラクは攻撃され、北朝鮮はなぜ攻撃されないのか。テロを生む原因となったイラクを含む中東には石油をめぐるアメリカの巨大な経済的利権が存在している。アメリカが中東に異常にに執着するのはそのためである。

グローバリズム批判も文化の多様性の尊重を謳っているように見えるが、現実には世界の経済的諸制度の一元化への抵抗と理解するべきであろう。

日中関係において「経済が政治を食う」という表現がある。これは両国の政治がどれほど冷えこもうとも経済関係を絶つことはできない事態を指した表現だ。世界の絶え間ない紛争や対立を文化ではなく、経済問題や貧困から理解するなら、統制的理念としての（構成的ではない）理想的な未来が展望できる。なぜなら経済問題や貧困なら将来において解決可能かもしれないからだ。

2．体系（システム）とマルクス

あらゆる理論は体系性を志向する。あるいは体系を志向しない理論は理論ではない。例えば構造論的説明はこうした体系性を最も強く志向する議論だといえよう。

振り返ってみれば西洋哲学の歴史は、自然科学、人文・社会科学を問わず、それが扱う対象に関して体系を構築してきた歴史であるともいえる。しかし、こうした試みはカントによって挫折させられた。周知のようにカントは人間にとって「思考不可能なもの」をアンチノミーに

よって示し、思考不可能なものへの問いを禁止し、哲学的問いを思考可能なものに限定した。カントは「思考不可能なもの」の一つに「世界とは何か」という問いをあげていたが、その試みはヘーゲルの弁証法的論理によって克服され、人間は弁証法的に「絶対知（真理）」に到達できると考えられるようになった。ヘーゲルの理論体系は強力で、世界を体系的に理解しようとする試みはヘーゲルを媒介にして急速に拡大した。そしてそうした流れをくむ議論はヘーゲル左派に属していたマルクスによって決定的となった。

マルクスは『経済学批判序文』（Marx 1961:7-11=1964:5-9）で、自分の研究の対象は「ブルジョア経済システム（das Systeme der bürgerlichen Ökonomie）」[2)]であると論じている。マルクスは大学では法律学を専攻していたが、このことに対してそれは哲学や歴史学に次ぐ二次的な専攻であると弁明し、自分が経済学に関心を持った経緯について、フランスで現実的な事情で経済現象に関わったことをあげている。

こうした事情を考えると、筆者は、マルクスの経済学への執着は、当時の悲惨な労働者の実態や、そうした労働者を搾取する資本家に対する批判や憎悪からではなく[3)]、マルクス自身の学問的な経歴からきていると考えている。ドイツからフランス、そして『資本論』を書き上げたイギリスという物理的・学問的移動がマルクスに「社会」を「経済」「政治」「法」「宗教」などの諸部分の集合として理解させることを可能にしたのではないか。ドイツで哲学を、フランスで社会主義を、そしてイギリスで経済学を学んだというようなありふれたマルクスの紹介はこうした角度から理解されるべきである。マルクスが社会を「部分システムの連関としてみる」という現在では当たり前の視座を開拓したという意味では、マルクスの社会観・歴史観に対してその後なされた批判を差し引いても有り余るものがあるのではないだろうか。

3．構造論（主義）的社会理論とDFT

3－1　システム論と微分法

マルクスの死後、マルクスの遺稿は奇妙な運命をたどっている。一方ではサルトルの実存主義と合流し社会変革（革命）における主体性の理論として理解され、その一方ではアルチュセールによって構造主義的に読解された[4)]。そこでまずエンゲルの手紙からマルクスとエンゲルスの思索の跡をたどることにしよう。

> 人間は自分の歴史じぶんでつくるのですが、しかし、これまでのところ、全体的計画にしたがって全体の意志によってつくるのではなく、明確に輪郭づけられた所与の一社会のなかで造るのでさえもないのです。人間の努力はぶつかりあっており、そしてそうしたすべての社会においては、まさにそのために、偶然性がその補足と現象形態をなすところの必然性が支配するのです。ここでいっさいの偶然性を通じて自己を貫徹する必然性は、これまた結局経済的必然性です。……歴史の中の他の全ての偶然事や偶然事と見えるものに

ついても同じことです。われわれがいま調べている領域が、経済的なものから遠ざかって純粋に抽象的なイデオロギー的なものに近づけば近づくほど、それだけますますわれわれはそれがその発展するなかで偶然事を現すのを見いだすであろうし、その曲線はますますジグザグになっていきます。しかし、もしあなたがこの曲線の平均軸線を描いてみるなら、考察される期間が長いほど、またこのように取り扱われる領域が大きければ大きいほど、この軸線がそれだけますます経済的発展の軸線に近似的に平行して走るのを見いだすでしょう。(強調は引用者)　(Engels[1894]1968:206=1975:186-7)

エンゲルスは曲線や平均軸線という数学的なイメージで社会変動を考えている。よって筆者は数学的比喩を用いてマルクスの緒論を整理することを試みたい。小室はパーソンズ流のシステム論を数学的手法を用いて表現（小室1974:15-80）し、DFT との違いを説明している。そこで DFT をまず数学的に表現することを試みたい。小室によると DFT はマルクス主義だけではなく、自然科学・社会科学においてごく一般的に用いられる説明であるという。第一章でも見たように DFT はごく自然な思考法であり、経済を基盤とした DFT はマルクス主義の特権ではない。なぜ経済を基盤とした DFT がこれほど普及しているのかを探究するのか本稿の目的である。

一般に社会的変数の中には数量化されないものが含まるため、このような数量化不可能なものを変数と呼ぶのは無意味ではないかという批判が想定されるが、それは集合論教育の不徹底と変数や関数などの基本概念の誤解からくるものである（小室1974:59-60, 広瀬1970:40-50を参照)。変数とは variable の訳であって、数量化されている必要はない。いかなる集合であっても、それは変数として取り扱いうるし、この変数の集合に特定の条件をおくことによって、社会学的に有意味なものとすることができる。

そこでモデルを構成する変数を例えば、x、y、z、関数をf、g、h、などとすると単純な線形因果律（linearcausality）は

$$y = f\ (x1,\ x2,\ x3,\ \cdots\cdots xn)$$

と表記され、またこの関係に媒介変数をおいた場合には、

$$y = f(c) \qquad c = g(x) \qquad c\text{は媒介変数} \qquad y = f(g(x))$$

と表現できる。

その一方システム論の趣旨を尊重すると、このような線形因果律は通用しないという。なぜなら社会現象のほとんどすべては、相互連関の網の目の中にあり、一方的な作用だけでなく、反作用も合わせて考えなければならないからである。そのため一般に社会科学のモデルは、変数間の相互連関関係を明らかにするために連立方程式で表現される。そこで3変数のシステムを考えると以下のような連列方程式が成り立つ。

$$\begin{cases} x = f(y, z) \\ y = g(x, z) \\ z = h(x, y) \end{cases}$$

こうした数式において f、g、h はそれぞれその社会の構造と呼ぶことができる。社会現象は、一方が他方を規定する（一方が原因で、他方が結果である）のではなくて、相互に規定し合うものである。換言すれば、社会現象の特徴は、その相互規定性にある（小室1974:31)。小室はパーソンズのシステム論はこのような性質をもつ社会現象を説明するのに最適であるとして、システム論的構造－機能分析は特定のイデオロギーや立場と密着したものではないと結論する。この立場に立てはいかなるイデオロギーを信じ、いかなる立場に立つ人であっても、理論的生産性の高い社会分析のためのモデルを構築することができると結論している（小室1974:78)。

ここで焦点になっているのは社会現象を原因－結果として分析する DFT の短絡的な回路への批判である。

そこでひとまずマルクスの理論装置について、一定の数的処理を施し、その後に DFT に対するこうした批判が正当なものであるかどうかを検討することにしよう。

フランスで発展した構造主義を代表する一人であるアルチュセールやその弟子であるバリバールによってマルクスの議論を構造論的に読解することが一つの可能性として可能となった。本稿ではマルクスの仕事を構造論的に解釈することにしたい。河本（1995:46-7）によると構造論的説明は第一世代システムときわめて親和性が高い。よって構造論的社会理論は以下のような第一世代システムの関数と同様に表現できるであろう。

$$f(x, y, z\dots\dots\alpha, \beta, \gamma)$$

x、y、z ……は、エネルギーや形態や各種機能系の状態を指標する変数であり、α、β、γ はそれらの調整因子である。第一世代システムの課題はさまざまな現象の根拠となる「関係」を規則構成的に解明することであり、その「関係」が現象の根拠として位置づけられるかぎり、それは「構造」と呼ばれる。マルクスの議論を数学的に表現するためにはこの関数の f がどのように定義できるかを明らかにすることが必要である[5)]。

そのため（マルクスの議論の数学的理解）にはドゥルーズ（Gilles Deleuze）の議論を参考にすることが有益であろう。

ドゥルーズはマルクスの社会観を「微分法 differentiation」という数学的方法論からアプローチしようとする興味深い論述を行っている。まず、ドゥルーズは、「理念（イデア）」という概念に着目する。ドゥルーズは理念を多様な諸連結のシステム、あるいは差異的＝微分的な諸要素間の差異的＝微分的な諸関係のシステムとして理解する。そしてこのような諸関係は、もろもろの具体的な人間の間にではなく、労働力の担い手もしくは所有の代理としての諸原子のあいだに打ち立てられるような、生産関係と所有関係であるとし、経済は、そのような多様体的＜理念＞によって、すなわち、差異的＝微分的な諸関係の変化性によって構成される（Deleuze 1968:240=1992:284）とする。

そして、理念的な多様な連結、差異的＝微分的な関係を、その諸要素が種々の項においてかつ種々の形状において現実的に具現されると同時に、各種の時－空連関のなかで現実化されるというのでなければならないとし、そのような意味で＜理念＞は、構造として定義される

(Deleuze 1968:237=1992:280)。

このような前提をおいた上で、ドゥルーズは、理念の潜在的な内容が規定されることを差異化＝微分化（différentiation）と呼ぶ。これに対して、そのような潜在性が、区別されたもろもろの部分として現実化されることを、異化＝分化（différenciation）と呼び（Deleuze 1968267＝1992:312）、構造とは、潜在的なものの実在性である（Deleuze 1968:70=1992315）とする。

このような議論を経て、ドゥルーズはマルクスの経済論について以下のように結論する。

> 経済は、厳密に言えば、けっして、すでに与えられた規定のものではなく、むしろ、つねに現実化の諸形式によって覆われているがゆえに解釈の必要がある差異的＝微分的なひとつの潜在性を指示しているのであり…厳密な見方をすれば、たとえ社会的問題の解が、法的、政治的、イデオロギー的であろうと、また社会的問題が、それらの解決可能性の場においてもまた表現されることがあろうと、いずれにせよ社会問題は、経済的な問題としてしか存在しないのである。(Deleuze 1968:241=1992:284)

ドゥルーズはある社会を特定の構造が規定しているというとき、これを微分によって考えるということを構想した。

この構想によると社会に理念として潜在的している「構造」を顕在化させる数学的手法が微分法であり、微分する（differentiate）ことによって具体的に求められる社会の構造が「経済＝生産関係」である。

ドゥルーズの微分法に関する解釈は非常に難解なものであり、抽象的に理解するのはとても難しい。そこで、微分法とマルクスの経済論に関して筆者なりの解釈を行っていきたい。

周知のように一般に微分はライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz、1646 - 1716）の表記法を用いて以下のように定義される。

$y=f(x)$ が与えられるとき

$$\frac{dy}{dx}=\lim_{\Delta x\to 0}\frac{\Delta y}{\Delta x}=\lim_{\Delta x\to 0}\frac{f(x+\Delta x)-f(x)}{\Delta x}$$

この式は Δx が無限に 0 に近づくときの $\Delta y/\Delta x$ の変化率（微分係数）を意味する。つまり、$\Delta y/\Delta x$ は $\Delta x\to 0$ のときの $f(x)$ の瞬間的な傾きを表す。

また dy/dx はラグランジュ（Joseph Louis Lagrange [1736-1813]）の方法では $y=f'(x)$ という関数として表記されるように $f(x)$ の導関数（derivative; a derived function）という性質がある。

つまり、微分して得られる導関数はもとの関数の全体を規定していると理解できるわけだ（具体的には $f'(x)$ の値の符号の変化が $f(x)$ の値の増減に対応し、極大、極小を形成する）。

例えば

a、b、c を実数とし、

$$f(x) = a(x-b)(x-c) \quad a > 0,\ b < c$$

という二次関数を想定すると

$f(x)$ は $x = b$ で+→−　$x = c$ で−→+という値をとる。ここで

$$\int f(x)dx = F(x)+t$$

$$\frac{d\{F(x)+t\}}{dx} = f(x) \text{ が成り立つから}$$

$F(x)+t$ はその変化（極値）がその導関数 $f(x)$ によって決定される（$F(x)+t$ は b で極大、c で極小）。

3－2　上下部構造論

微分法、導関数について上記の点について確認した上で、マルクスの論理構成の中で、上下部構造論と労働価値説について考察したい。まずは本稿の主題に沿って『ドイツ・イデオロギー』、『経済学批判序文』、『資本論』の論述を結びつけて上下部構造論について考えたい。

> われわれはあらゆる人間的存在の、したがってまたあらゆる歴史の、第一の前提、すなわち人間は「歴史をつくり」うるためには生きることができなければならないという前提を確認することから始めなければならない。ところで、生きるためにはなにはさておき飲食、住その他、若干のことができなければならない。したがって最初の歴史的行為はこれらの必要の充足のための諸手段の産出、物質的生活そのものの生産であり、しかもこれは、今日なお何千年前と同じように人間たちをただ生かせておくために日々刻々、果たさなければならぬひとつの根本条件である。(Marx1958:28=1963:23-4) ……人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいる。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実存的土台であり、その上に一つの法律的および政治的上部構造がそびえ立ち、そしてそれに一定の社会的諸意識規定が対応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活一般を制約する。(Marx 1961:8-9=1964:6)

労働は生存の維持にとって必然であると同時に、労働を通じた生産によって特殊な類的生活（生産関係／経済）にはいる。

> 中世はカトリック教によって生きていくことはできなかったし、古代世界も政治によって生きていくことはできなかったということだけは、明らかである。逆に、これらの世界がその生活を維持した仕方こそが、なぜ、あちらでは政治が、こちらではカトリック教が演

じたのか、を説明するのである。(強調は引用者) (Marx 1962:96=1972:151-2)

マルクスは歴史の第一要因は、人間の生命・生活の再生産であるという視点を重視する。そのため、多面体としての社会の「導関数」として「経済（生産関係)」が析出されることになる。そのため「経済」という現象を観察の基礎に据えれば、社会全体の動きが把握できるとマルクスは主張しているということになる。

この状態を微分で現すと以下のような式として表現できる。

$$\frac{dS}{dRPL}=E$$

S（社会）　RPL（生命の再生産）　E（経済）

こうして「人間の生命の再生産」を媒介にして社会と「経済（生産関係)」の連関関係が明らかになった。

次にこうして導き出された「経済」と全体社会との関係について考察を進める。マルクスやエンゲルスが指摘するように社会はさまざまな審級（システム）から構成されているため、社会と経済の関係について数学的に記述するためには、単純な一変数の微分ではなく、多変数の微分について考えなければならない。よってここでは偏導関数を用いることにする。偏導関数は例えば、二変数からなる関数 Z を考えると以下のように定義される。

変数 y を一定に保ちながら、x を変化させるとすると

$$Z=\varphi(x,y)$$

$$\lim_{\Delta x\to 0}\frac{\varphi(x+\Delta x,y)-\varphi(x,y)}{\Delta x}=\left(\frac{\partial\varphi}{\partial x}\right)_y$$

ここで社会を、法（L)、政治（P)、経済（E)、宗教（R)、文化（C)、学問（Sc）の各審級の複合体と考えると、全体社会は以下のような関数として表現できる。

$$S=\varphi(L,P,E,R,C,Sc)$$

φ の各変数が数的処理の可能な変数として表現され、全微分可能な特定の関数として構成されていると仮定すると φ の全微分は

$$dS=\frac{\partial\varphi}{\partial L}dL+\frac{\partial\varphi}{\partial P}dP+\frac{\partial\varphi}{\partial E}dE+\frac{\partial\varphi}{\partial R}dR+\frac{\partial\varphi}{\partial C}dC+\frac{\partial\varphi}{\partial Sc}dSc$$

と表現できる。

ここで φ が全微分可能（変分が同時に0に近づく）な関数であるならば偏微分可能である。

そこで社会の下部構造が経済であるということは

$S=\varphi(L,P,E,R,C,Sc)$ は E についての偏微分

$$\left(\frac{\partial\varphi}{\partial E}\right)_{L,P,R,C,Sc}$$

によって変化率が決定されることを意味する。

ここであえてランダウの表記法（Landau symbol）を用いるとEの変化（増分）がφに対応するという意味でφとEの関係は

$$\varphi(L, P, E, R, C, Sc) = \Theta\left(\left(\frac{\partial\varphi}{\partial E}\right)_{L, P, R, C, Sc}\right)$$

と定義できる。

3－3　労働価値説と微分法

次に労働価値説について考察しよう。労働価値説はマルクス主義の諸概念の中でもっとも評判の悪い概念の一つである。その理由は労働価値説が剰余労働の搾取と密接に結びついた学説であるからだ。労働価値説は「労働時間→付加価値」という明確な因果関係を取る。

労働価値説は微分法では資本（C）を労働（L）で微分すると考えることができる。

$$\frac{dC}{dL}$$

宇野はマルクスが『資本論』において流通過程を生産過程に先立つものとして分析していることを何度も指摘している（例えば、宇野1973:16、192)。柄谷はマルクス－宇野の流れをくみ、剰余価値の発生を流通過程に見ることを一貫して主張している（最近の文献では Karatani 2003)[6]。宇野や柄谷が注目するのはマルクスの「相対的剰余価値」という概念である。相対的剰余価値とは現在の用語で言えば労働生産性をあげて労働時間を短縮することによって得られる利潤のことを指す。労働生産性は、付加価値／投下労働量と定義される。付加価値を決定するのは消費者であり、よって剰余価値は流通で発生することになる。労働過程で生産された商品に流通で消費者という「他者」の視点が導入されることを意味する[7]。付加価値創造の手段は、技術革新によって新たな価値体系を作り出し（将来を先取り）それを現在の価値体系に投入する場合と、記号の操作によって別のブランド空間を作り出し、それを現在の価値空間に投入する場合の二つが考えられる。現在のような消費社会では、技術革新と記号の操作（ブランドイメージとデザイン）を組み合わせて付加価値を作り出している。よって商品の価値は労働によって決定されるのではない。しかし、商品を労働者が作り出しているのは間違いないので、この二つの事実を両立するた

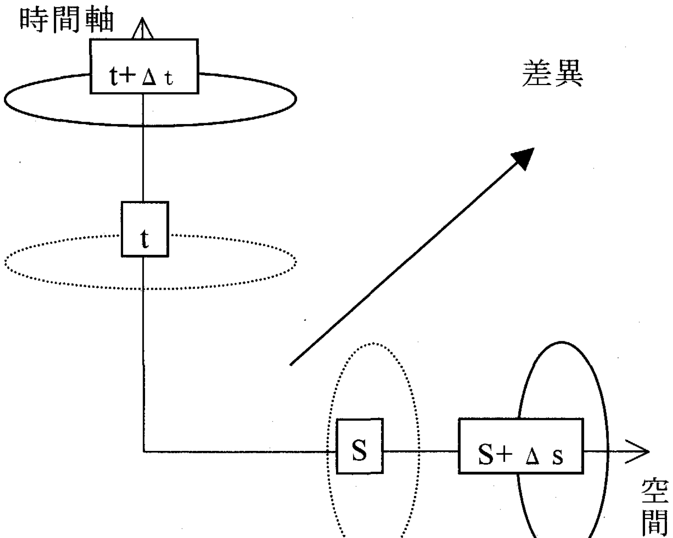


図1　付加価値の源泉

め、先の式を連鎖微分法（合成関数の微分）によって変形することにしよう。連鎖微分法は以下のように定義される。

$y = f(x),\ y = f(z),\ z = g(x)$

とするとき

$$\frac{dy}{dx} = \frac{dy}{dz} = \frac{dz}{dx}$$

ここでZを時間（t）と空間（S）に変換すれば次のような剰余価値獲得の手段のための数式が成り立つ。剰余価値（Surplus-Value）は

$$\frac{dC}{dt}\cdot\frac{dt}{dL} \text{ または } \frac{dC}{ds}\cdot\frac{ds}{dL}$$

によって決定される。

4．コミュニケーションと個人 —偶然と必然 —

理論がDFTをどう扱うかという問題に対して重要な示唆を与える議論を交わしたのがデリダ（Jacque Derrida）とラカン（Jacque Lacan）である。DFTの核心は物事を原因－結果の連鎖で理解するということであった。DFTの性質は「すべてが同時／相互依存的に決定されるという小室の主張するパーソンズ流のシステム論と鋭く対立する。
フロイトは精神分析という技法において心理的には「偶然」は存在しないと断言している。

> 私は、私自身の心の動きの無意識的な現れが、もちろん、私の心の営みの関係のあるものについてだけではあるが、なにかある秘密を私に教えてくれると信じている。すなわち、私は、外的（現実的な）な偶然は信じるけれども、内的（心理的な）な偶然は信じないのである。
>
> Ich glaube aber , daß eine unbeabsichtigte Äußerung meiner eigenen Seelentätigkeit mir allerdings etwas Verborgenes enthüllt, was wiederum nur meinem Seelenleben angehöort ; ich glaube zwar an äußeren (realen) *Zufall*, aber nicht an innere (psychische) *Zufälligkeit*. (Freud 1941:286=1970:219)

精神分析を体系的に理論化したラカンは「盗まれた手紙に関するセミネール」という論文において「手紙は必ず宛先に届く（une letter arrive toujours à destination）(Lacan1966:41) というテーゼを掲げた。ラカンのこのテーゼの意味は主体にとって「出来事」は常に事後的に必然化され、客観化された視座を得るということを意味している。

構造論的人間学と呼ばれることもある（例えば河本2000）ラカンの理論装置では、主体は自己を構成する象徴界（le symbolique）の作用によって偶然を必然に加工する。象徴界とは言

語の共時的で構造化された集合／束であり、意味を事後的に遡及するという言語の性質が、出来事の事後的な必然化というメカニズムを支えている[8)]。

ラカンのテーゼに対し、デリダは真っ向から反撃した。デリダは手紙をコミュニケーションに例え、手紙が相手に誤読される可能性を主張した。

> 手紙は必ずしも常に宛先に届くわけではなく、そしてそのことが手紙の構造に属している以上、それが真に宛先に届くことは決してなく、届くときも届かないこともありうるというその性質が、手紙を一つの内的な漂流で悩ましていると言い得るのである。
>
> *une lettre n'arrive pas toujours à destination* et, dès lors que cela appartient à sa structure on peut dire quelle n'y arrive jamais vrainment, que quand elle arrive, son pouvoir-ne-arriver la tourmente d'une dérive interne. (Derrida1980:517)

筆者の考えるところでは、ラカンとデリダの対立は主体とコミュニケーションに関してどちらからどちらを理解するかということにかかっているように思える。つまりラカンはコミュニケーションが伝達する言語を主体が観察するという概念装置によって近代哲学の伝統を前進させたのであり[9)]、その一方でデリダはコミュニケーションの側から主体を捉えるという全く別の視点を開拓したといえる[10)]。コミュニケーションの側に立てば、「偶然を必然化する」という人間のもつ独特の機制は問題にならない。デリダのこうした態度はデリダがフロイトの「科学心理学草稿 *Entwurf einer Psychologie*」に着目していたことからも理解できる。

一般にフロイトの精神分析はエディプスコンプレックスの発見以後に誕生したといわれている。ラカンとデリダの対照的な点は、ラカンがフロイトのこの履歴に忠実であるのに対して、デリダは一貫してエディプスコンプレックスの発見／理論化以前の初期のフロイトの論考に着目している（例えば1967=1983）ことである。

20世紀を決定づける精神分析誕生前夜のフロイトは、神経症やヒステリーの病因についてニューロンネットワークの構造からアプローチしていた。この未完の論考でフロイトは、情報を通過させても全く状態が変化しない「ϕ ニューロン」と情報を通過させると状態が変化し、知覚情報を保持する「ψ ニューロン」二つのニューロンを区別している。人間の心はこの ψ ニューロンと、その間を張り巡らされた経路のネットワークで構成され、その情報処理経路はすべて心的エネルギー量（$Q\acute{\eta}$）の移動から説明されている。$Q\acute{\eta}$ が ϕ ニューロンと ψ ニューロンとの間でどのような経路をたどるかという構造的な関係から記憶は決定される（Freud 1987:373-486）。

デリダは ψ ニューロンを人間＝主体に、$Q\acute{\eta}$ をコミュニケーションが運搬する情報に対応させ、ニューロンネットワークモデルをコミュニケーション論に応用したと考える解釈も成り立つ[11)]。フロイトのこのモデルはエディプスコンプレックスの発見／理論化以来放棄されるためデリダとラカンのどちらがただしいとはもちろんいえないが、デリダのこうした観点からのフロイトへのアプローチは独特であるといえる。

世界を主体からではなく、主体と主体の間を伝達されるコミュニケーションから見るというデリダの立場は偶然を偶然のまま留保する。ところがこうしたアイデアは体系化を目指すという学問に伝統的な態度と折り合うことができない。なぜなら偶然は理論化できないからだ。偶然を理論化するとき、それは偶然ではなくなる。偶然は理論化不能なのである。しかし、人間は無意識に偶然を必然として理解している。世界を体系的に理解しようとするものにとっての「理論」とは、偶然に満ちあふれた社会の代理物としての「対象ａ」ということになるであろう。フロイトが哲学者をパラノイア（Freud1944:91=1968:209）であると風刺しているのはこうした事情による。

偶然や他者そして多様体としての世界そのものを写す写像が存在するとすれば、それらは常に体系から逃げていく。偶然（＝予測不可能性）はテクスト空間においてコンスタティブに記述できるものではなく、社会的コミュニケーションの場でパフォーマティブに実践していくしかない。

偶然は常に体系の外に外在している。例えば偶然を内部化するとしてそれを数学的に表現する手段としては確率が考えられる。しかし確率とは一定の確からしさで所与の事象が起こりうるということであり、偶然（予測不能性）とは違う。よって偶然は数学的処理や表現にはなじまないのである[12]。数学はもっとも形式化されたコミュニケーションでありその内側に偶然を囲い込むことはできない。

アルチュセールは社会における「偶然」を最大限尊重しようとした。アルチュセールが重層決定／構造因果性と呼んでいるのはそうした工夫の現れである。その結果、重層決定とそのメカニズムとしての構造因果性はパーソンズ的システム論にどこまでも近づいていく。しかし、アルチュセールは重層決定／構造因果性（偶然）を主張しながら[13]、結局「諸構造を編制する構造としての経済の最終審級における決定」という概念を放棄できなかった。アルチュセールは諸構造を編制する構造[14]という形で経済の最終審級における決定を留保し、最後まで、偶然と決定論の間で揺れていたといえる。

５．心的システムとコミュニケーションシステム

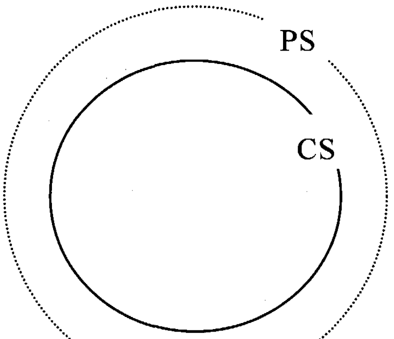
筆者はデリダの社会をコミュニケーションの偶然の衝突の連なりとして捉えるという発想は、社会をコミュニケーションシステムとして理解するルーマンの問題意識ときわめて共鳴としていると考える。ルーマンは個人には還元できない「社会的なもの」としての「コミュニケーション」システムを理論化した。ルーマンはコミュニケーションを情報・伝達・理解という三極の統一体として理解することを提案している。コミュニケーションが成立するのは、情報と伝達行動の差異が観察され、確認され、理解されて、この差異が接続行動の選択を基礎づけるばあいに限られている（Luhmann 1984: 196=1993:221）。つまり、情報と伝達の差異を理解することがコミュニケーションを可能にする。よって＜革新／核心＞的で重要なことは、「理解と

は理解する者（自我）とされる者（他我）との間に何かが共有されるということを意味するわけではないということだ。自己の側で件の差異が観察され、引き受けられるときには常に―すでに理解が生じている。理解は自己の側で一方的に生じる」（馬場2001:64-5)のである。また社会システムと心的システムは意味（Sinn）という形式で複雑性を加工する（心的システムは言語による構造化によって意味が与えられる)。コミュニケーションシステムは事象的（何が世界に現れるか)・社会的（誰が事物を主題化するか)・時間的（あることがいつおこるか）次元（Sach-Sozial-Zeit-dimention）の３幅対によって構成されている。

人間の意識システムは社会システムではないが、ルーマンは意識のオートポイエーシスに関する理論化も行っており（Lumann1984:402-46)、ここでルーマンの意識のオートポイエーシス論について河本の整理（河本1995,2001）を補助線として概観しておこう。

オートポイエーシスはシステムの作動を内側から記述する。そのため、心的システム（意識システム）は思考の接続として理解される。オートポイエーシスシステムは一般に、Kn、Kn＋1の作動の後にKn＋2が産出されれば、Kn＋2 ＝ f(Kn＋1, Kn）で表現されるシステムとして形成される。

オートポイエーシスシステムとしての心的システムは構成素として思考を産出し、システムそのものの境界を自ら確定しているが、心的システムはこの産出的作動を通じて気がついたときには構成素の自己をそれとして確定している（オートレファレンス)。オートレファレンスによって自己をそれとして確定した思考は、区別された構成素であり、こうした思考は、伝統的な用語法では表象とよばれる。表象は産出されたものというより、確定的に構成されたものである。つまり、表象の産出をつうじて心的システムは、再度あらためてみずからの境界をひく。つまり、この過程を通して、心的システムは自己の内部と外部の区別（自覚的な自己と、それに対比される他者の区別「自己にとっての他者あるいは対象」）を行う。ここでは心的システムの産出的作動を通じて導入した境界を、表象をつうじて自覚的にひきなおした境界で置き換えている。このとき観察者は首尾一貫して、表象という心的システムの内部と、この表象がそれについての表象であるところの外界を見分ける内／外の外に立ってしまう。観察者はあたかも、システムの内部と外部をともに見分けるような位置を得るが、それというのも心的システムの境界を、二次的に高次の作動によって導入された自覚的境界と等値しているからである。観察はみずからの行為を隠蔽し、産出された思考を表象するだけであり、表象は区別された思考であるために、表象の産出を心的システムの境界導入だと



PS=Psychic System

CS=Communication System

図２　社会システムと意識システムの関係

すると表象は心的システムに対置された外界についての表象となる。思考のオートレファレンスという産出的作動を通じて形成された表象によって導入される境界を、心的システムの自己の境界だとみなすのであれば、表象はこの自己の内部に属し、この自己に対置された外界の対象についての表象になる。これが個人／社会という二分法における社会である。ここに主体と客体という認識論的基本図式が成立する。精神分析における主体とは、この二次的作動によって自他の境界をひく観察（まなざし）のことである。ラカンは、境界によって外部として区別された表象を、象徴界、想像界、現実界の三幅対に分類したと理解できる。

つまり、心的システムは構成素として思考を産出（構成素の産出的作動）するが、構成素間の相互関係づけの作動によって産出された構成素と相互作用するよう作動することができるため、オートポイエーシスは産出的作動を通じてすでに気がついたときには構成素の自己をそれとして確定してしまっている。次に構成素の自己言及性が導入され、表象間に自己と他者の境界が設定される。

社会学や精神分析そしてあらゆる人文・社会科学には作動という発想がないため、システムの作動の後に新たに設定される境界に基づいた主客図式を前提とした反省から議論を開始する。例えばミードのＩ と me の二元論はこうした経緯の必然として導入される。

ルーマンは「社会的なもの」に焦点を合わせ、位相学的外部に位置する意識システムを議論の中心に据えることは少なく、コミュニケーションシステムとして機能分化した各システム間の構造的カップリングが考察の中心となっている。

ルーマンは、マルクスが経済を機能分化したシステムとして概念化したことを評価しつつ (Lumann1992:23=2004:11、1990:182-3=1996:206) も[15)]、他のシステムとの機能の平行関係が十分に理解されておらず、全体社会をもっぱら経済の方から把握する点を批判している (Luhmann1992:25-6=2004:14)。確かにマルクスは社会の複雑性の縮減に関して、経済以外の諸審級（各機能分化したシステム）間の相互影響関係については考察せず、経済システム／資本制経済からの縮減／観察の記述に専念した。

「複雑性の縮減」とは形式的には

$$\Delta K = K(U) - K(S)$$

複雑性（Komplexitat）　環境（Umwelt）

と表現され（大庭1990:217）、複雑性の差異の程度をシステム境界越しの出入りに耐えられる程度へとシステム自身の働きを通じて減少させながら ΔK を維持することを意味する。ルーマンによると「人間のみが、世界の複雑性が自覚されると、環境が選択的に構成されているということが自覚され、そのことによって自己を維持していくときに準拠すべき問題が自覚される。人間は世界を主題化して捉え……単なる可能性を決断を下さなければならないものとして自分自身を認識することができる」(Luhmann1973:5-6=1990:7) ため、意識システムは常に何らかの社会／コミュニケーションシステムとカップリングすることを試みる。しかし、労働の対価を貨幣で受け取る（賃労働）資本制経済では心的システムにとって貨幣のみが生命を再生産

するメディアとして観察されるため、ΔK は経済システムと意識システムの間でまず最初に区別され、維持される。つまり、経済システムを震源として、つまり、経済システムの観察による社会の記述は心的システムによる社会の観察と一致することが多い[16)]。そのため意識システムと社会システムの最初の複雑性の縮減はまず経済システムとの間で行われる。例えば河本（対談2001:102）はシステムは稼働性の高い所から作動してしまうとして、環境問題に関してCO_2の排出権の売買という経済システムの作動が最初に稼働してしまったことを指摘している。また河本は（2001:93)、「システムが機能分化する」というとき、特定はできないが先行するシステムを想定せざるを得ないため、システムの導出関係の場面でイメージされている分化と、その分化が完了した後でのシステム／環境図式でしかとらえられない各機能分化システムとの間には論理的に不連続が存在していると指摘している。賃労働による労働契約が誕生した近代は最初に経済システムから分化し始めたと考えても良いのかもしれない。
ここでマルクスの社会の観察をシステムとして理解すると以下のようになるであろう。

プログラム：生命の再生産のための労働を通じて特定の生産関係への参入とそれに基づく構造化
バイナリーコード：労働する／労働しない

マルクスのこうした観察システムが、人間／意識システムの観察と共鳴するためマルクスの経済システム側からの観察は社会において大きな影響力を保ち続けていると考えられる。

筆者は先にデリダとルーマンの理論装置は親和性が高いと指摘したが、それはルーマンがコミュニケーション（＝社会）からコミュニケーションを観察しているためである。ルーマンの方法を使ってラカンの理論装置を翻訳すると象徴界、想像界、現実界のボロメオの輪は心的システムとコミュニケーションのカップリングにおいて、時間差を持って個人に伝達されるコミュニケーションを特定の時点で切断し、そうしてできた共時的シニフィアンの体系を心的システムが観察する、と説明できる。

既に論じたように、意識システムの観察は経済システムの観察と極めて類似する。そのため経済システムの行う社会の観察を意識システムが行う社会の観察と等値することができる。そうすると、ラカンが理論化したように人間には「偶然」を「必然」に加工するメカニズムが存在するため、どうしても経済システムから観察した社会に関する記述が主流の言説として意識システムには構造化されてしまう。そして人間が因果性を悟性（理解能力）の先験的なカテゴリーとして持ち合わせている以上、マルクス流の経済を基盤としたDFT は避けることができないのである。そもそも小室が主張する、「すべてが相互規定的/同時に決定される」というパーソンズ流のシステム論的説明ははたして何かを説明したことになるのか。また、すべてがすべてに依存するという手法を採るパーソンズ流のシステム論がイデオロギー・フリーであるという主張がひとつの観察に過ぎず、この観察（すべてがすべてを同時に決定するパーソンズ流のシステム論）は果たしてイデオロギー・フリーなのかという新たなシステム論的観察を導

き出さざるをえない。肝要なのはDFT／システムという区別なのではなくてあるDFTが存在するとき、それが社会のどのシステムによる観察であるのかを明らかにする（セカンド・オーダーの観察）ことである。

注

1）後に述べるように本稿で擁護するのは、単一（優越）要因説（uni-dominant factor theory　以下uDFTと略）の擁護ではない。
ここでDFTの事例としてケインズの経済理論を挙げておこう。
パシネッティ（Pasinetti）（1974:42-5）はケインズの有名な「一般理論」を次のような図式を使って見事に説明している。

$$\phi(L, M) \rightarrow r \rightarrow \phi(E, r) \rightarrow I$$

まず、貨幣の流動性選好によって貨幣需要（L）と貨幣供給量（M）の関係から利子率が決定される。

$$M = L(r)$$

こうして決定した利子率rと資本の限界効率Eの関係によって投資Iが決定される。投資Iに対応して所得Yと消費Cが決まる。
図で明確なようにケインズのこうした単線的な因果モデルは典型的なDFTである。
2）systemは従来、「体制」と訳されてきたが社会学の領域におけるシステム論の発達を考えてあえてシステムと訳した。
3）マルクスが大学教育を受けるのに充分なブルジョア出身であることを思い出されたい。
4）デリダは、不確定な未来（à-venir）に来るべきマルクス主義を亡霊として擁護している。
5）第三世代システムの視座からするとこうした「関係」は作動の結果にすぎないのであるが、このことが忘れられ、「関係」そのものが実体化されてしまう。
6）マルクスが生産より流通を重視していた点に関する詳細な分析に関しては藤嶋（2002）を参照。
7）流通における他者の問題に関しては藤嶋（2004）を参照。マルクスは資本の流通過程について次のように論じている。

> 貨幣の資本への転化は、商品交換に内在する諸法則にもとづいて展開されるべきであり、したがって等価物どうしの交換が出発点をなす……貨幣所有者は、商品をその価値どおりに買い、その価値どおりに売り、しかもなお過程の終わりには、彼が投げ入れたよりも多くの価値を引き出さなければならない。彼の蝶への成長は、流通部面のなかで行なわれなければならず、しかも流通部面のなかで行なわれてはならない。これが問題の条件である（Marx1962:180-1=1972:291）

資本は流通から発生するわけにはいかないしそれは流通から発生しないわけにはいかないのである。資本は、流通のなかで発生しなくてはならないと同時に、流通のなかでは発生してはならないのである。ここがロドスだ、さあ跳んでみろ（Marx1962: 180-181=1972:291）。

ここでマルクスが指摘している流通を、もし労働力商品の流通すなわち労働市場と考えれば、剰余価値の実現は労働者の搾取であるが、流通を労働生産物の流通と考えれば剰余価値は流通で発生する。

8）大澤真幸は主体の持つこうした性質を「第三者の審級の先行的投射」と呼んでいる。言語の性質から生じる「意味同定」の事後性に関しては藤嶋（2002）を参照。
周知のようにカントは原因－結果という連鎖（因果性）を悟性（人間の理解能力のこと）の持つ先験的なカテゴリーであると指摘している（Kant1781:19-41, 76-83=2001:95-128, 153-164）。人間には時間と空間をアプリオリに前提にして因果律に従ってものごとを理解する性質がある。例えば、異常（猟奇的）犯罪が発生するとマスコミはその理由を知りたがるが、異常な犯罪の因果性が理解できるのなら、それは異常ではない。しかし、人間は原因（因果性）がわからないと不安なためそれを求めるのだ。

9）ギデンズはデュルケムーパーソンズが個人／社会という区別を用いて理論を構成していることを批判している（Giddens1976=1987）。しかしこの区別は西洋哲学に伝統的でありラカン／ジジェクにも同じ特徴が見られる。この点に関する詳細な分析は藤嶋（2002）を参照のこと。
景井充は、社会的自己論の源泉としてミード、パーソンズ、そしてパーソンズの理論的先人であるデュルケムをあげ、彼らの議論が、常に、価値や、制度、非人格性の高い他者など、「何ものかの共有」という姿で社会の成立を考えるために、その社会像が一元的で調和的にならざるを得なかったと指摘している（影井2000:311）。こうした社会学的自己論の問題点に関しては藤嶋（2001）を参照。

10）デリダの学説の概要やデリダのフロイト解釈は、東（1998）の議論に多くを負っている。

11）エディプスコンプレックスを理論化するためにこのニューロンネットワークモデルを解釈する議論も存在する（例えば竹中2004）。

12）東（1999）は「偶然」を「確率」と同一視している。しかし、サイコロを例に取ると、例えば１という目は１/６の確率で必ず出るのであって、「偶然＝予測不可能性」とは異なる。デリダは予測可能性に関して確度の高い将来（future）と予測不可能な未来（à-venir）を区別している。

13）アルチュセールも、ラカンの手紙のテーゼを西洋哲学の伝統に重ね合わせて批判的な主張を行っている。

盗まれた手紙に関するよく知られたセミナールの中で、ポーのテクストに関する緻密かつ興味深い分析の後、ラカンは「従って、手紙は常に宛先に届いている」と締めくくる。この言葉はシニフィアン、文字、シニフィアンとしての無意識、についての哲学上の意味、残響を過剰に背負った言葉である。各宛人の哲学ではなく、運命の哲学、従って最も古典的な目的論哲学にそっくり支えられたこの言明に対して、私は単純に次のような唯物論的テーゼを対置したい。それは、手紙は宛先に届かないことがある (il arrive qu'*une letter n'arrive pas à destination*)、というテーゼである。(Althusser 1993:203-4=2001:227-8)

14) アルチュセールの重層決定というアイデアはDFTの持つ否定的なニュアンスを可能な限り排除するために考案されたと解釈することができる。アルチュセールの「経済の最終審級における決定 (La détermination en dernière instance)」という概念は、エンゲルスがこの二つの手紙で用いた用語法の批判的継承である。この二つの手紙の内、例えば1894年の手紙でエンゲルスは以下のように論じている。

われわれは経済的諸条件を、究極において (in letzter Instanz) 歴史的発展を条件付けるものと見ます。……政治的、法律的、哲学的、宗教的、文学的、芸術的などの発展は、経済的発展に立脚しています。しかしそれらの発展はまたすべて、相互に反作用しあいますし、経済的土台に反作用します。経済状態が原因で、それだけが能動的で、他のものはすべて受動的な結果にすぎないというのではありません。そうではなくて究極的には (in letzter Instanz) 常に自己を貫徹する経済的必然性という基礎のうえでの相互作用なのです。……マルクスが『ブリュメール十八日』の中で与えた見事な模範は、まさにそれが実例であるが故にそれだけでもうあなたの質問に教えてくれているように思います。(強調はエンゲルス) (Engels[1894]1968:206=1975:185-6) (エンゲルスからボルギウスへ)

マルクスは『L,ボナパルとのブリュメール十八日』でフランスの革命運動はその過程で、議会における代表する者 (上部構造) と代表される者 (下部構造) の関係が必ずしも対応せず、複雑に絡み合っていることを見事に描写していることは有名である。
アルチュセールは、こうしたエンゲルスの記述を受け、上部構造の相対的自立性と、経済の最終審級における決定を両立させようとする。

マルクスでは、経済と政治の暗黙の合致は消え、そのかわりにあらゆる社会構成体の本質をなす構造—上部構造の複合体における、規定的諸審級 (instances déterminantes) の関係という新しい概念が現れる。構造と上部構造のあいだの独特の関

係がなお仕上げと理論的探究に値すること、これにはいかなる疑いの余地はない。しかしながら、マルクスはわれわれに「鎖の両端」をあたえており、探究すべきものは両者のあいだにある。一方では（経済的）生産様式による最終審級による決定があり、他方では上部構造の相対的自立性とその独自の有用性がある。（Althusser1965:111=1994:181-182）

社会構成体にはさまざまな水準があり、その領域の矛盾がそれらの領域を横断し、複雑に交錯している。しかし、このような一見まとまりのないような多面体もその凝集力として垂直的な作用＝経済が影響力を行使しているのである。経済が最終的に「複合的な全体なるものの支配関係を構造化（structuration à dominante du tout complex）」（Althusser 1965:219=1994:354）を行っているのである
アルチュセールはエンゲルスに決定的に重要な影響を受けている。しかし、アルチュセールは、上下部構造論における「偶然」という概念の扱い方に関してエンゲルスと見解を異にする。エンゲルスにとって、上部構造は、あらかじめ経済が設定する変動幅／軌道という「必然」の内側で、偶然に動く。よって時間的地平で見ると、経済の変動と、上部構造の変動は平行関係にあることになる。その一方、アルチュセールにとって上部構造（各審級）は四方八方を完全に自由に動きまわる。そうした過程を経由した上で、経済は最終審級において決定因として、経済を含むすべての審級を、支配関係を持つ全体として、統一体に編み直すと考える。つまり、「社会編制において、どの要素が、“支配”的になるかは、経済的土台が、最終審級において“決定”する」（Althusser 1968:319）。具体的には、封建制社会の支配因は、政治であり、資本制社会の支配因は、経済である。
アルチュセールは極限までDFTを拒絶しようとした。そのため社会変動を重層決定／構造因果性という「偶然」の別名で呼んだのであるが、最終的に経済の「最終審級における決定（La détermination en dernière instance）」という概念を捨て去ることができなかった。しかし、エンゲルス＝アルチュセールの解釈以来マルクスの理論はuDFTとしての性質は緩和された。
小室は、システム論では「すべてのものがすべてに依存し、一か所に生起した変化の影響が無限に波及していく」（小室1974:23）と論じているが、この波及していく効果が一定の軌道に制限されることをアルチュセールは主張しているのである。
15）ルーマンはマルクスの資本制経済の理論化を以下のようにシステム論的に翻訳している。

経済は自己記述をみずから投企する。自己を経済の理論そのものの内側で描き出し、そこから内的記述と外的記述を規制する（die Wirtschaft ihre Selbstbeshrebung von sich he entwirt, sich in ihrer Theorie selber darstellt und von da aus interne und externe Referenzen reguliert.）（Luhmann1992:25=2004:13）

16) 第三世代のオートポイエーシスは、システムの機構／作動を内側から記述するため、機能分化した各システムの全体（経済・政治・法、宗教等）を俯瞰するような視点をもてない。機能分化した各システムはそれぞれ異なったプログラムとバイナリーコードで社会を観察している。プログラムは変更できるが、バイナリーコードは変更できない。そのためシステムがことなれば同じ現象も全く異なった事態として観察される。例えば今日問題となっているニート・フリーターも道徳的あるいは倫理的な観察（同情的なもの一般）ではなく、経済システムから観察すると、彼らは税金をおさめない不良債権であり、将来の税収の減少と社会保障費の増大という問題が浮かび上がる。経済システムのこうした観察はあくまでも一システムから観察であるが、現在ではこうした観点からの議論が主流であるように見える。

文　献

Althusser, Louis, 1967 *Pour Marx*, Paris:Maspero.（＝1994河野・田村・西川訳『マルクスのために』平凡社.）

――――――, 1970, "Glossary", tr.byBen Brewster, *Reading Capital*, London: The Gresham Press, 309-23.

――――――, 1993, *Écrits sur la psychanalyse*, Paris: Stock/IMEC.
（＝2001,石田靖夫訳『フロイトとラカン――精神分析論集』人文書院.）

東浩紀, 1998,『存在論的，郵便的』新潮社.

――――, 1999,『郵便的不安たち』朝日新聞社.

Crépon, Marc, 2002, *L'Imposture du Choc des Civilisations*, Paris, Preins Feux.（＝2004, 白石嘉治訳『文明の衝突という欺瞞』新評社.）

Derrida, Jacque, *L' écriture et la difference*, Paris: Seuil.（＝1983, 若桑毅訳『エクリチュールと差異(下)』法政大学出版局）

――――, 1980, *Le Facteur de la vêrité*, La Carte Postale, Paris:Flammrion,441-524.

――――, 1993, *Spectres de Marx*,; Paris:Galilée.

Deleuze, Gilles, 1968, *Difference et Répêtition*, Paris, Presses Universitaires de France.
（＝1992, 財津理訳『差異と反復』河出書房新社.）

Engels, Friedrich, 1968, *Karl Marx-Friedich Engels : Werke, Band 39*, Institute für Marxismus- Leninismus beim ZK der SED, Berlin:Dietz Verlag.
（＝1975, 大内兵衛・細川嘉六監訳『カール・マルクス＝フリードリヒ・エンゲルス全集第三九巻』大月書店）

藤嶋康隆, 2001,「社会理論の精神分析」 西日本社会学会 自由報告(1),

――――, 2002,「精神分析における他者概念に関する社会学的研究」『人間科学　共生社会学』

九州大学人間環境学研究院, 81-96.

————, 2003,「労働価値説再考 ── ラカン派精神分析の観点から」『西日本社会学会年報』西日本社会学会, 創刊号, 111-20.

————, 2004「ダイエットと拒食症に関する社会学的一考察」『人間科学　共生社会学』九州大学人間環境学研究院, 61-73.

Freud, Sigmmud, 1944, *Totem und Tabu*, Gesammelte Werke BandIX, Frankfurt: Fischer Verlag,1-196.（＝1969,西田越朗訳「トーテムとタブー」高橋義孝他訳『フロイト著作集第三巻』人文書院,149-281.）

————————, 1941, *Zur Psychopathologie des Alltagslebens*, Gesammelte Werke Band IV, Frankfurt: FischerVerlag.（＝1970, 池見酉次郎・高橋義孝訳『フロイト著作集第四巻』人文書院.）

————————, 1987, *Entwurf einer Psychologie*, Gesammelte Werke Nachtragsband, Frankfurt: Fischer Verlag,373-486.

Giddens, Anthony, 1976, *New Rules of Sociological Method*, London:Polity Press.（＝1987松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳『社会学の新しい方法的基準』而立書房）

広瀬和子, 1970,『戦争と法』勁草書房.

景井充, 2000,「社会学的自己論の一源泉 ── パーソンズ, ミード, そしてデュルケム」『現代社会理論研究』10号：307-316.

Kneer, Georg., und Nassehi, Armin., 1993, *Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme*, Munchen: Wilhelm Fink Verlag.（＝1995,舘野 受男・野崎 和義・池田 貞夫訳『ルーマン 社会システム理論─「知」の扉をひらく』新泉社.）

Krause, Detlef, 2005, *Luhmann-Lexikon, Eine Einfuhrung in das Gesamtwerk von Niklas Luhmann* Stuttgart: UTB Verlag

Lacan, Jacpues, 1966, *Écrits*, Paris: Editions du Seuil.

Kant, Immanuel, 1781, *Kritik der reinen Vernunft*, Berlin: Johann Friedrich Hartnoch.（＝2001 有福孝岳訳『カント全集4　純粋理性批判上』岩波書店.）

Karatani, Kojin,2003,Transcritique on Kant and Marx,tr.by Sabu Kohso, Cambridge:MIT Press.

片桐雅隆, 2003,『過去と記憶の社会学』世界思想社.

河本英夫, 1995,『オートポイエーシス』青土社.

————, 2000,『オートポイエーシスの拡張』青土社.

————, 2001,『オートポイエーシス2001』新曜社.

河本英夫・土方透2001「環境の拡張」『現代思想』, 青土社, 29-3,86-105.

小室直樹, 1974,「構造－機能分析の論理と方法」『社会学講座　第１巻 理論社会学』東京大学出版会, 15-80.

Luhmann, Niklas, 1973, *Vertrauen*, Frankfurt: Ferdinand Enke Verlag. (＝1990, 大庭健・正村俊之訳『信頼――社会的な複雑性の縮減メカニズム』勁草書房.)

————, 1984, Die Autopoiesis des Websstseins, *Soziale Welt: Zeitschrift für Wissenschaft und Praxis des sozialen Lebens/* Herausgegeben von der Sozialforschungsstelle, Dortmund, Göttingen: Otto Schwartz Verlag, 36-4, 402-46.

————, 1984, *Soziale Systeme*, Frankfurt: Shurkamp.
(＝1993, 佐藤勉監訳『社会システム理論（上）』恒星社厚生閣.)

————, 1992, *Beobachungen der Moderne*, Berlin: Westdeutscher Verlag.
(＝2003, 馬場靖雄訳『近代の観察』法政大学出版会.)

————, 1990, *Essays on Self-Referenence*, New York: Columbia University Press.
(＝1996, 土方透・大澤喜信訳『自己言及性について』国文社.)

————, 2004, *Einfuehrung in die Systemtheorie*, Heidelberg: Carl-Auer.

————, 2005, *Einfuehrung in die Theorie der Gesellschaft*, Heidelberg: Carl-Auer.

Marx, Karl, 1958, *Deutsche Ideogy*, Kar Marx-Friedrich Engels Werke, Band 3, Berlin: Dietz Verlag.
(＝1963, 真下真一訳『マルクス＝エンゲルス全集　第三巻』大月書店.)

——————, 1961, *Karl Marx-Friedich Engels: Werke, Band 13*, Institute fur Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin: Dietz Verlag.
(＝1964,大内兵衛・細川嘉六監訳『カール・マルクス＝フリードリヒ・エンゲルス全集第十三巻』大月書店.)

——————, 1962-64 *Das Kapital*, Kar Marx-Friedrich Engels Werke, Band 23-25, Berlin, Dietz Verlag. (＝1972岡崎次郎訳『資本論(1)-(8)』大月書店.)

Muller, John P and Richardson, William J., 1998, *The Purloined Poe: Lacan, Derrida and Psychoanalytic Reading*, New York: Johns Hopkins University Press.

大庭健, 1990,「訳者解説Ⅰ」大庭健・正村俊之訳『信頼――社会的な複雑性の縮減メカニズム』勁草書房, 201-23.

佐藤嘉幸, 2003,「精神分析理論から構造変動の理論へ――アルチュセールにおける構造変動と偶然性」『思想』岩波書店６月号, 130-49.

竹中均, 2004,『精神分析と社会学』明石書店.

Pasinetti, Luigi L, 1974, *Growth and Income Distribution*, New York: Cambridge University Press.

宇野弘蔵, 1973,『経済原論』岩波書店.

山田昌弘, 2004,『希望格差社会――「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房.